

1、はじめに

つい最近まで、私は、戦国期にあれほど活躍した「一向一揆」の中核は、浄土真宗の本願寺教団だと理解していた。確かに石山本願寺の顕如や教如などは織田信長や徳川家康の戦国大名に反抗し「一向一揆」を組織したと歴史教科書では教えられている。徳川家康で言えば、謀臣といわれる本多正信までが反抗した「三河一向一揆」、さらには織田信長に根絶やしにされた願証寺を中心とした本願寺（一向宗？）門徒の「長島一向一揆」や紀州の雑賀衆や毛利水軍を巻き込んでの「石山本願寺の合戦」は有名である。

だから、浄土真宗の門徒である我々でさえ「一向一揆」・「一向衆」と聞けば、条件反射的に「イコール=浄土真宗=本願寺」をイメージしてしまう。しかし、私の属する和讃講である時、「なんで一向宗ではなく浄土真宗なんや。戦国時代は一向宗と呼んでいて、今は浄土真宗というのは何でやね」という話題になった。なるほど、一向宗という名称は現在では聞かず歴史のなかでしか聞かない。常識的にいえば今の本願寺は一向宗とならなければおかしいな、とそのときは思った。そのとき居合わせた住職（大房・本願寺派金照寺・西川龍乗氏）から、「浄土真宗と一向宗は、必ずしも同じではないとの説があります」ということを聞いた。本願寺からは門徒衆に対して一向宗（一向一揆）に加わらないよう再三に涉って通達が出されていたという。

今から20年前に、私は市役所の職員組合系の機関紙「解放」紙上に「**時宗と真宗における被差別民衆のかかわりについての一考察**」(PDF版で我がHPに掲載)というレポートを投稿した。その時に、真宗教団が拡大したのは時宗系の聖や民衆（その大勢は被差別民）を吸収したからだというように書いた記憶がある。しかし、一向宗と浄土真宗の関係については触れていなかった。そこで、改めて、引っ張り出した当時の原稿や資料から、以下の論を展開するものである。

2 一向一揆の性質について

1488年、加賀の一向衆徒が蜂起して守護富樫政親を倒し、以来、90年近く加賀国は「百姓の持ちたる国」となった。その後も一向一揆が国内のあちこちで戦国大名に反抗し武力蜂起を起こしている。そのため九州（薩摩・肥後）や関東（北条氏）などでは一向宗が禁止されたところもある。では、一向宗つまり浄土真宗は、支配者を脅かすほど過激な思想を持った宗教なのか。今、私は和讃講や仏教壮年会に参加して活動しているが、ついこの間も名古屋であった西本願寺の新門さまを迎えての第18回全国仏教壮年東海大会に参加してきたばかりであるが、そんなに過激な宗教とは思われない。昔と今では教義が違ってくるのだろうか、とも思ったりしたが、中興の祖といわれる蓮如上人が、いつも我々門徒が拝読する「御文章（御文＝おふみとも東ではいう）」のなかで、繰り返し次のように述べているのを発見した。

(意識)『阿弥陀仏にひたすら帰依し、信心を深めるように。他の神仏に後生の(一大事)救済を求めてはならない。かといって他のいろいろな仏神を否定したり軽んじたりしてはいけない。世俗の慣習も尊重し、真宗では行わない物忌みにも同調するように。自分自身が念仏修行により信心を得たとしても、守護地頭を軽んじることがあってはならない。年貢・公事をきちんと納めること』と諭している。

つまり、排他的にならず他の宗派や支配者と協調するようにと穏健な教えを説いているのである。それなのに、なぜ各地の門徒は、支配者を武力で攻撃するような行動をとりつづけたのだろうか。一向一揆を研究している神田千里氏や辻川達夫氏、出口治男氏などによれば、真宗と一向宗は別物であるという。

「一向宗」という名称は、鎌倉時代つまり開祖親鸞聖人の頃からあったという。浄土真宗を、そう呼んだわけではなく、まったく別なところから成立したものとされている。

「一向宗」と呼ばれた宗派は、同じ浄土系の念仏宗ながらも土俗的な性格が強く、加持・祈祷・占いを生業として民衆の中に入り込むのを常としていた。山伏・念仏僧・琵琶法師などが多かったという。これは一遍上人の時宗を支えた構成員と同じである。ちなみに一向上人の一向宗も当時は明確な宗派を確立しておらず、時宗系の一派とみなされていた。加賀一向一揆のときの一向衆のなかには白山の長吏も入っていたとされる。彼ら一向宗徒は時宗(一向宗を含む)とも重なりを見せながら、諸国を巡り歩き、祈祷や占いによって民衆の心をつかみ、信仰を広めていったのである。そして彼らは、形のうえでは、真宗または時宗(大きくは浄土系)の組織に所属していた。つまり、浄土真宗の本願寺は、内部に大勢のこうした異分子を抱えていたわけである。15世紀後半に、浄土真宗(本願寺)が急速に信者(勢力)を増やしていったのは、蓮如の精力的な活動に負うところが大きい。だが、こうした「一向宗」の力がなかったならば、とても、これほどの発展は望めなかったに違いないと、前述の神田氏はいう。

本願寺教団は、たしかに蓮如上人の努力と一向宗(浄土宗の一宗派という位置づけ。時宗も浄土系の一派とも考えられていた。もっとも浄土真宗自体も浄土宗の一派である本願寺派と考えられていた。ここで本願寺というときは蓮如以降の本願寺教団をさす)をベースとした念仏衆徒(その多くは被差別民衆)に支えられ膨大な数の民衆を結集できるようになったが、蓮如が繰り返し唱える教義は、なかなか門徒には浸透していかなかった。ここでは「一向宗」が障碍になったのである。もともと「一向宗」というのは、教義のうえではあやふやだったから、ただ念仏を唱えて現世と来世のご利益を期待するばかりにとどまっていた。そしてその単純な考えが民衆にとっては蓮如の教え以上に受け入れやすかったのではないだろうか。(後段の参考文献を参照されたい。)当時はまだ一向宗や時宗の念仏信仰がベースにあった状況のなかでは、蓮如の「御文章(御消息ともいい本願寺からの通達文のこと)」も末端の門徒の行動をなかなか規制できなかったであろう。逆に言えば、民衆の側は本願寺の貴種系譜(親鸞の出自は藤原氏につながる公家の日野家であると本願寺は教化に利用した)を逆手にとって、本願寺の權威を民衆が活用したといえる。蓮如が

組織した門徒組織すなわち「講」をリードしたのは主に国衆・土豪であり、彼らの上昇志向は、守護勢力と衝突せざるをえなかったものであり、その下には真宗の教義とはかけ離れた多数の一向宗あるいは時宗の信者が現世の利益を求めて転向し本願寺教団に集まっていたと考えられる。またそのなかには信仰とまったく関係ない農民たちも、やはり現世の利益だけを求めて加わっていたに違いない。そうした一向一揆衆が加賀一向一揆を起こし、他の地域でも大きな戦闘力を持つようになった時、戦国大名たちは、これを無視できなくなっていたのである。それでも本願寺は蓮如の三代後の顕如（11代）まで権力者への反抗を禁止しており、しばしば破門という奥の手を持ち出したとある。しかし、織田信長が上洛して石山本願寺を圧迫するに至り、本願寺も一向一揆の俗的な力を認めざるを得なくなり、顕如は、これまでの態度を一変させ、織田信長を「法敵」と規定し、全門徒に信長と戦うことを呼びかけたのである。本願寺から言えば一部の異端派＝「一向宗派」が中心になって起こした権力者への反抗は、ここにきてついに本願寺（法主）までも同調した形で、初めて本願寺組織はひとつにまとまったのである。これにより、本願寺の権力者への反抗は一向一揆と後世では呼ばれることになったのである。しかも、留意いただきたいのは同じ真宗系統であっても蓮如の本願寺系をそう俗称されたのであり、仏光寺派や高田派などは一向衆とは呼ばれていない。当時はまだ浄土宗の一派とみなされていたらしい。また本願寺教団が拡大する過程で、高田派や仏光寺派などの他の真宗各派の信者を吸収していったことは容易に想像できることである。

さて、一向一揆の総集編とも言われる本願寺（教団）と織田信長のいわゆる石山戦争はまる十年も続いた。そもそも本願寺（法主顕如）にしても各地の一向一揆に対して為政者に対する反抗を止めよとの指令をたびたび出しており、上洛したての頃の信長の矢銭50貫の要求さえおとなしく出している。一方信長にしたって決して仏教嫌いではない。自分の権力に逆らいさえしなければ、それなりに保護してやるという姿勢であった。安土城下での浄土宗と日蓮宗の安土宗論をみればそれは理解できよう。（余談だが宗論はどちらが負けても釈迦の恥。という言葉がある）荒木村重の叛乱に係わっての高野聖の虐殺や比叡山延暦寺を焼き討ちしたのも、長島一向一揆を根絶やしにしたのも自分の権力に反抗したためであり、それは一人信長だけでなく戦国大名すべてについて言えることである。（虐殺は徳川家康や豊臣秀吉も同じことをやっている）信長と本願寺が衝突したのは一般的にとらえられているように、思想上の相違ではなく、信長が本願寺のある石山（大阪）の地がほしくて本願寺に立ち退きを要求したのが原因だといわれている。このことも、今回調べていてわかったことである。

3、念仏を称えざるをえない人々の側からの出発

一向一揆に時衆の影すなわち、「浄土真宗」内に旧「時宗」系勢力があったことは先述した私の「時宗と真宗における被差別民衆のかかわりについての一考察」にも触れたところであるが、浄土真宗と一向宗の関係についても若干整理しておく必要があるだろう。そも

そも、法然の弟子であった一遍上人や一向上人の時宗と一向宗の違い、あるいは同じ浄土真宗であっても蓮如上人以降の本願寺系の東西本願寺派と本願寺から分かれた興正寺派（本願寺教団）を除く高田派、仏光寺派などの真宗7派は一向一揆にかかわりがあったのか、なかったのか、など疑問点は多々あるが、私なりの推論（根拠となる資料まで集められなかった）を展開しておこう。なお、引用文については文献名・作者等引用元を文中に明記する。

もともと一遍上人の時宗にしる、一向上人の一向宗にしる、その念仏を支えたのは、定住型の農民よりも非定住非農耕の人々である。時宗系（踊り念仏）と「河原者・散所・革多・非人」との関連は一遍上人時代から強いものがあつた。井上鋭夫氏の「一向一揆の研究」では 時宗は室町時代にはかなり北陸をはじめ地方に弘通しており 本願寺一門のなかにも時宗（衆）の者がいたが背信行為でなかったこと 真宗が時宗と混同され、一向宗と呼ばれたのはかなり古い時期からであること 北陸における本願寺教団の形成に大きく寄与した井波瑞泉寺や加賀二股の本泉寺では時宗の僧侶が重きをなしていた。ことから井上氏は、時宗の念仏が真宗弘通の基礎をなしていたという。さらに時宗の参入とあわせ真宗他派から本願寺に帰参した門徒群が、本願寺教団隆盛の基幹をなしたともいう。井上氏は、蓮如以前の真宗を「古真宗」とし蓮如以降を「新真宗」と分けて考察するのが便利であるとしている。また赤松俊秀という方は「一遍上人の時宗について」という論文で、「中世に多かった時宗寺院の大部分は、蓮如以降、真宗が急激に発展した最大の要素は、時宗教団吸収によるものである」と述べている。その根拠として 蓮如以降の真宗に時宗の教義が進入し異安心の問題を引き起こしたこと。そのため蓮如はご文章でたびたび注意している 従来、外部から無碍光宗と称せられていた真宗が、蓮如以後、急に一向宗と呼ばれるようになったこと 真宗内では本願寺門主の流れは本来親鸞廟の一留守職に過ぎなかったにもかかわらず、その一派の者をして絶対的な権威者の地位にのぼらせたのは、時宗の教義の影響であり、蓮如以前の真宗内部の伝統からは生じ得ないものである。と説明している。すなわち「古真宗」こそ一向宗の担い手であり、本願寺が浄土系宗派や真宗宗派に対抗して本山としての性格を示し始めたとき（＝すなわち蓮如による本願寺教団の成立）まず本願寺の傘下に結集したのが、時宗系の山の民や川の民であつたのである。一遍は時宗の基礎を提供したが、一遍自身は一宗を立てる考えもなかった。あとを継いだのが一向俊聖上人ではなかったのだろうか（このことは資料がないので想像ではあるが）と思っている。だから「古真宗」は時宗の転宗というより「一向宗」からの転宗の一形態ではないかと考えるものである。逆にいえば「古真宗」は実は「真宗」ではなく「一向宗（時宗の一派という捉え方）」であつたのである。そして蓮如のあらわれたあと、「一向宗（＝時宗）」は一斉に蓮如の「真宗（＝本願寺）」に転宗し、蓮如時代の本願寺教団のなかの一大勢力になるものであり、この本願寺内の時宗系一向宗（衆）の勢力が一向一揆の主力をなしていくのではないかと考えたのである。

すでにみてきたように、蓮如の本願寺派が教団にまで発展したのは、近江では堅田の馬借や湖族、北陸では白山系修験者、金堀り、散所に類する者などの当時は賤民とされた人々の「ワラリ」や「サンカ」＝山の民、川の民、海の民、遊芸・漂白の民が支えたからである。当然、本願寺教団に吸収された（結集した？）人々のなかには、時宗や一向宗からの転向組や同じ真宗でも本願寺以外の他派からの信者もいたと考えられる。おそらくこれらの人々が自らを「一向宗」と名乗っていたのではあるまいか。昨年、鳥越村（現在は白山市となっている）の一向一揆歴史館を訪ねたが、その印象としては山の民（白山系）の里という感じだった。あんな山奥に一向一揆衆の砦を築くなんて、山の民にしかできないことである。

4、本論を締めくくるにあたり

蓮如が「ご文章」のなかで、一向宗について、次のように書いています。

「そもそも当流の名称を自他宗ともに、一向宗と呼ぶは大いなる誤りである。開山聖人より一向宗と仰せられたことはなく、その作られた文章には真宗とある。しかるに諸宗の方から一向宗と呼ばれることははなはだ疑問であるし、当流のなかで自分から一向宗と名乗ることはもってのほかである。元来、一向宗というのは時宗の側の名称であり、一遍、一向がこれである。その源は江州番場の道場であり、これがすなわち一向宗である」と述べている。蓮如は「ご文章」のなかで一遍の流れをくむ一向宗を自分の真宗とは違うのだと強調しているのであるが、その「真宗＝本願寺教団」の内部には時宗や一向宗の勢力を内包して（取り込んで）門徒化＝拡大してきたのは前述したとおりである。それがゆえに、一向一揆の原動力となった一向宗徒の信仰は「時宗系（一向系ともいえるが、混乱するので狭義の一向宗をも含んで時宗系とする）」浄土真宗＝古真宗であったと推理するものである。そして本願寺自身も彼ら門徒を表向きには異端といいながら、教団拡大には必要とし利用したのである。それゆえ、後世、歴史のうえからも、他宗派から「本願寺教団の門徒衆」のことを「一向衆」と称したのは、あながち間違いではないのである、と私は結論するものである。一向宗の「古真宗」衆徒は、その戦闘性を堅持したまま、そのエネルギーを一向一揆へと繋いでいったのである。そのため蓮如時代には否定していた反権力の闘争エネルギーも、顕如や教如の時代には、反信長ということで、認めざるを得ない状況となったということである。本願寺が異端をみとめたということは、本願寺教団による反抗や本願寺門徒による支配者への反抗を「一向一揆」と呼ぶことを認めたということである。

【参考文献】・・・本論を補足するものとして、以下を引用。参考程度にしてください。

1、一向一揆のこと・・・文中に示した HP（URL）を参考としています

<http://siinayasutane.hp.infoseek.co.jp/ikkouikki/ikkouikki.htm>

当時「浄土真宗」は「一向宗」と呼ばれていたが、これは外部の呼称である。わが浄土真宗のことを、世間ではみな「一向宗」と名づけている。これはいったい、どういうわけなのか、私も常々疑問に思っていたところである。わが宗派を一向宗と名乗ることは、とくに祖師親鸞聖人もお定めになっていません。たぶん、わたくしども真宗門徒が阿弥陀仏に一向専修（いっこうせんじゅ＝阿弥陀一仏の本願を信じて、ひとすじに専ら念仏の一行を修すること。）することから一向宗と呼ばれたようである。元来は時衆（宗）の呼び名であったが、浄土真宗（当時は本願寺門徒といったが、他の真宗の仏光寺派、高田派などは、本願寺教団には入っていない）が、阿弥陀一仏に帰命するので、他宗から浄土真宗の俗称として用いられるようになったという説明である。しかし蓮如上人は、一向宗という呼び方は決して浄土真宗の側から言わないと誠められている。一向上人の一向衆（時宗一向派）との混同もみられる。そこで、親鸞や蓮如からのご文章等から、考察してみよう。

以下に参考となる文献がホームページ上にあったのでそこから引用する。

文献に見る「浄土真宗」の名称

（参考出展元：浄土真宗やっとかめ通信（東海教区仏教青年連盟）Q&A より）

<http://www2.big.or.jp/~yba/index.html>

ご存知のように「浄土真宗」という名称は、経典や法然上人までの書には見受けられませんが、親鸞聖人の書かれた文章やお言葉に見ることができます。

例えば――



大無量寿経 真実の教 浄土真宗

〔『顕浄土真実教行証文類』 教文類一 標拳〕

つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり。

〔『同上』 教文類一 真宗大綱〕

まことに知んぬ、聖道の諸教は在世・正法のためにして、まったく像末・法滅の時機にあらず。すでに時を失し機に乖けるなり。浄土真宗は在世・正法・像末・法滅、濁悪の群萌、斉しく悲引したまふをや。

[『同上』 化身土文類六(本) 聖道釈 二門通塞]

ひそかにおもんみれば、聖道の諸教は行証久しく廃れ、**浄土の真宗**は証道いま盛んなり。

[『同上』 化身土文類六(末) 後序]

論家(天親)・宗師(善導)、**浄土真宗**を開きて、濁世、邪偽を導かんとなり。

[『浄土文類聚鈔』 問答分]

智慧光のちからより 本師源空あらはれて
浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまふ



[『高僧和讃』 源空讃 (九九)]

浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし
虚仮不実のわが身にて 清浄の心もさらになし

[『正像末和讃』 悲歎述懐 (九四)]

浄土真宗のならひには、念仏往生と申すなり、まったく一念往生・多念往生と申すことなし、これにてしらせたまふべし。

『一念多念文意』

真実信心をうれば実報土に生るとをしへたまへるを、**浄土真宗**の正意とすとしるべしとなり。

『唯信鈔文意』

浄土宗のなかに真あり、仮あり。真といふは選択本願なり、仮といふは定散二善なり。選択本願は**浄土真宗**なり、定散二善は方便仮門なり。**浄土真宗**は大乘のなかの至極なり。

[『親鸞聖人御消息』(末灯鈔) 有念無念の事]

「**浄土真宗**には、今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくとならひ候ふぞ」とこそ、故聖人(親鸞)の仰せには候ひしか。

[『歎異抄』 (15)]

以上『親鸞聖人御消息』や『高僧和讃』等にありますが、親鸞聖人は自分で一宗旨を開こうという意志はありませんでしたので、「浄土真宗」という名称も法然上人の「浄土宗」が「真」であることを指していて、「仮」というのは聖道門の浄土宗を指しているようです。

また『浄土文類聚鈔』の文は、その名称が天親菩薩の活動にまで遡って含め、大乘仏教の歴史の本道として「浄土真宗」があることを述べてみえます。

宗名をめぐる歴史

その後、親鸞聖人の教えを慕う人々の間で、宗教的な面での浄土真宗は息づいていましたが、宗名の問題はあやふやなままでした。特に本願寺は蓮如上人以前は比叡山延暦寺の末寺として扱われてきましたので、とても一宗旨として独立した形にはなっていませんでした。

蓮如上人の時代に本願寺は大発展を遂げますが、この時も「浄土真宗」という宗名は認知されていません。

この点について、上人は――

問うていはく、当流をみな世間に流布して、一向宗となづけ候ふは、いかやうなる子細にて候ふやらん、不審におぼえ候ふ。

答へていはく、あながちにわが流を一向宗となのは、別して祖師(親鸞)も定められず、おほよそ阿弥陀仏を一向にたのむによりて、みな人の申しなすゆゑなり。しかりといへども、經文(大經・下)に「一向専念無量寿仏」と説きたまふゆゑに、一向に無量寿仏を念ぜよといへるころなるときは、一向宗と申したるも子細なし。さりながら開山(親鸞)はこの宗をば浄土真宗とこそ定めたまへり。されば一向宗といふ名言は、さらに本宗より申さぬなりとするべし。されば自余の浄土宗はもろもろの雑行をゆるす、わが聖人(親鸞)は雑行をえらびたまふ。このゆゑに真実報土の往生をとぐるなり。このいはれあるがゆゑに、別して真の字を入れたまふなり。

[『御文章』 一帖 15 宗名章]

【意識】(蓮如の手紙/国書刊行会より)

お尋ねします。

わが浄土真宗のことを、世間ではみなが「一向宗」と名づけています。これはいったいどういうわけなのか、疑問に思うのですが。

お答えします。

わが宗を一向宗と名乗ることは、とくに祖師親鸞聖人もお定めになっていません。たぶん、わたくしどもが阿弥陀仏にひたすらお従いしているために、人びとがみなそのようにいうのでしよう。

とはいうものの『大無量寿經』には「一向専念無量寿仏」と説かれていますが、これが「一向

(ひたすら)に無量寿仏(阿弥陀仏)を念じなさい」という意味ですから、この経文によっていうのならば、一向宗と申してもさしつかえはありません。

しかしながら、開山親鸞聖人は、この宗を浄土真宗とお定めになっています。ですから、一向宗という名前は、決してわたくしどものほうから申すべきではないと知らねばなりません。

ところで、法然上人の流れを汲む浄土宗のうち、浄土真宗以外の諸派では、雑行を真実の浄土に往生する行として認めています。しかし、わが親鸞聖人はそのような雑行を選び捨てられました。このゆえに、阿弥陀如来のまします真実の浄土へ往生することができます。こういうわけで親鸞聖人はとくに“真”の字を入れて、浄土真宗と仰せられたのです。

というように憂慮され、世間では一遍の時衆とその系譜の一向上人の一向(衆)宗と混同されていた様子が伺えます。

また「一向宗」の他に「本願寺宗」「門徒宗」「無礙光宗」とも呼ばれていて、「開山はこの宗をば浄土真宗とこそ定めたまへり」という思いは、江戸時代になっても中々実りませんでした。

そんな折り、安永3年(西暦1774年)に紀州藩では「浄土真宗」の呼称が公認されます。そこで「浄土真宗」の宗名を公文書に記述できるように、東西本願寺が協調して幕府へ願い出ましたが、浄土宗(増上寺)側の反対に会い(宗名事件)、決裁を見ませんでした。

この時の反対の理由は、表面上は、「浄土真宗の名称は善導の『観経疏』にあり、これはもとより浄土宗のことだ」ということでしたが、これは全くの誤謬で、「真宗」の名はあっても「浄土真宗」の名称はどこにもありません。

しかし一旦、老中田沼意次が増上寺の請を受け入れる場面があったり、江戸増上寺や鎌倉光明寺等の浄土宗の寺が勝手に「浄土真宗」の額を掲げたり、札を立てたりして、宗名問題はますます紛糾します。

この争いは前後16年間継続しますが、幕府は結論を出すことができず、政務多忙の理由から訴えを取り下げるように命じます。

(なお、宗門改帳には、各々、「浄土宗」「浄土真宗」の名を使っていた)

その後明治時代になって――

明治4年(西暦1871年)、政府は一旦「一向宗」と定めますが、

翌5年「真宗」を公的な名称として認可します。

明治9年(1876年)、興正派が本願寺から独立し、

翌10年に各派が別立するに際し、西本願寺は浄土真宗本願寺派と称します。

明治14年(1881年)、西本願寺派を「真宗本願寺派」、東本願寺派を「真宗大谷派」と称するようになります。

昭和 21 年（1946 年）、西が「浄土真宗本願寺派」と呼称するようになり、本願寺派以外は「真宗〇〇派」と称することになる。

以上のように、「浄土真宗」や「真宗」という宗旨名は、最初から用いられたわけではありませんでしたし、それを認可せしめるためには、強い主張と大変な努力を要したわけです。

ただその中において、宗門内外に大変な混乱を招いてしまったことは否めず、またその名称も、「他派と差をつけるため」に「浄土真宗」としたのであれば、教えと矛盾することにもつながります。

しかし「浄土真宗」が宗祖において発揮された名称であることを思うと、それを大切に受け止めていただくと心が決した結果とも言えましょう。

2、一向宗のこと・・・引用元 <http://hokuriku.yomiuri.co.jp/bunka/bun0509/bun0509.htm>

ここまで蓮如に否定されている一向宗とはどんなものかと調べてみたら、これまた意外と世間には知られていない宗派であった。略歴をみると・・・【一向上人】一向宗（一向衆）の開祖は、一向俊聖（いっこうしゅんじょう）（1239～1287）である。と書かれていた。以下そのことについて、詳しいことが読売（北陸）新聞で次のような紀行が掲載されていたので、参考にしてください。

一向宗の盛衰風景

秘められた宗教・・・北陸文化考

樽谷 雅好(高岡市児童文化協会)



滋賀県米原市にある浄土宗一向派本山・蓮華寺

どんな分野にもあることなのだろうが、日本の歴史や宗教に関しても、特定の研究者や関係者にとってはごく普通の知識が、世間一般にはほとんど知られていないということが間々見受けられる。世間の 1 人である私にとって、例えば、浄土真宗がそうなのである。

真宗王国などと称される環境の中で生まれ育ったせいか、東派と西派の 2 つの本願寺派だけが浄土真宗だと、長いあいだ思いこんでいた。ところが実は、本願寺派よりもっと古くに成立した高田派や仏光寺派

が今も存在する。また、福井県に四ヶ本山と呼ばれる三門徒派・誠照寺派・山元派・出雲路派が現存し、かつて加持祈祷（きとう）・踊り念仏・秘事法門が行われたものもあると知って驚いてしまった。

【一向宗と浄土真宗は同じではない！】

かといって、加越能（富山、石川両県）の住民が没個性的だった訳ではない。我々の先輩たちは、長享2年（1488）から天正8年（1580）までの約90年間、百姓の持ちたる国と称され「越中をも加州と同様に一向衆の相計（はから）う国」とした“加賀一向一揆（いっき）”を、日本史上に燦然（さんぜん）と刻記しているからである。

ところで、この一向一揆という時の“一向”とは、一向宗のことだ。広辞苑を繰ると（一向に阿弥陀仏を信ずるからという）浄土真宗のこと、とある。ただし、一向一揆の頃（ころ）は、一揆方は悉（ことごと）く同じ浄土真宗の高田派と対立抗争していたから、精確（せいかく）には、かつての本願寺派だとすべきで、この呼称は微（かすか）に現代にまで及んでいる。というのが常識だと、私は思いこんでいた。しかし存外にも、全く違った“一向宗”の顔を歴史は示してくれるのである。

吉崎（福井県金津町）に居た時の蓮如の御文（おふみ）に、実はこんな件（くだ）りがあるのだ。

当流ノナカニ、ワレトナノリテ一向宗トイフコトハ、オホキナルアヤマリナリ。

文明5年（1473）

つまり、本願寺の宗主は我が宗派は浄土真宗であって、一向宗などと自称してはいけないと主張しているのである。後に一向一揆が勃発（ぼっぱつ）すると、論調は更（さら）に厳しくなる。

夫（それ）、一向宗ト云（いう）ハ時衆（じしゅう）方ノ名ナリ、一遍一向是也（これなり）。其源（そのなも）トハ江州バンバノ道場、是則（これすなわち）一向宗ナリ。此名（このな）ヲヘツラヒテ如此（かくのごとく）一向宗ト歟（いうが）。是（これ）言語道断之（の）次第（しだい）也（なり）。...

所詮、自今（いまより）己後（いご）、当流ノ行者ハ、一向宗トミツカラナノラン輩（やから）於（おい）テハ、永（ながく）可当流門下者也（とうりゅうのもんかたるべからざるものなり）。（訓のルビは筆者・・・樽谷氏のこと）

延徳2年（1489）

ここまで蓮如に否定されている一向宗とはどんなものかと調べてみたら、これまた意外と知られていない宗派であった。

【一向上人】

一向宗（一向衆）の開祖は、一向俊聖（いっこうゆんじょう）（１２３９～１２８７）である。

俊聖八髪ソルヒマモナカリケル 南無阿弥陀仏ノ声ハカリシテ

と詠（うた）い、「衣の裳をつけず、念仏する時は頭をふり肩をゆりておどる」「一向弥陀一仏に限て、余行余宗をきらふ」（天狗草紙）という、諸国を遊行（ゆぎょう）して踊り念仏を修する僧であった。建暦２年に筑後国竹野（たかの）荘西好田（福岡県浮羽郡田主丸町・久留米市あたり）で生まれた。奇しくもこの同じ年に、時宗（時衆）の祖・一遍智真も生まれている。この２人は行業が似ているためによく混同され、江戸時代には一向宗が時宗に組み込まれてしまった。

一向上人は、６歳（以下、満年齢）のとき書写山に上って天台教学を修めるが、１５歳で下山。南都に師を求めるも得られず、２０歳にして東国に下り、法然の法孫・然阿良忠に師事。３４歳、良忠のもとを辞して一派を立て諸国遊行の途につく。以後、九州・四国・中国・近畿に不断念仏を執行（しぎょう）し、踊り念仏を修す。

【金沢での布教】

『一向上人伝』巻４によれば、４５歳となった弘安７年（１２８４）の春に、

加州金沢に弥陀安置の道場ありけるに、上人暫（しばらくととまり）給（たまひて）、踊躍念仏したまふたとある。あらゆる階層の男女がひしめきあって参集し、結縁した。この盛況ぶりに危機感を覚えた聖道（禅宗や旧仏教など）の僧ら３０人ばかり、一向上人を難詰しようとして道場に押しかけたが、却（かえ）って一向上人の教説に感じ入って多くがその門徒になったと記されている。この阿弥陀堂は勿論（もちろん）のこと一向上人の伝説すら、金沢市内で探しだすことはできなかった。

『一向上人伝』は嘉暦３年（１３２８）、一向俊聖の忌日１１月１８日に同阿良向が編んだという。ところが、金沢という地名は『天文日記』天文１５年（１５４６）１０月２９日条に「金沢坊舎」（金沢御堂）と出るのが初見（『石川県の地名』平凡社）で、鎌倉時代まで遡（さかのぼ）ることができないとされる。

そのため一向上人による金沢での布教ということは、石川県では承認されていない（『加能史料』など）。つまりは一向上人の存在そのものが一般的に知られる機会を得ておらず、非常に残念である。宗門としては当地で浄土真宗に席卷（せっけん）されてしまったが、真宗より以前に布教されたからこそこの名称今に伝わったと私は考えている。（現在は浄土宗に吸収され一向派として存在している。）

【番場の蓮華寺】

一向上人は弘安７年、金沢を発（た）つと越前を経て近江に遊行する。「坂田の郡馬場（ばんば）米山の麓（ふもと）に一の草堂」あって、ここで念仏を執行。同地に八葉山蓮華寺を建立した。弘安１０

年(1287)、「歡喜の咲(えみ)を含ミ 立(たち)なから息き絶へたまひける」と立往生(たちおうじょう)の奇蹟(きせき)を示した。上人48歳の時という。

先日、滋賀県坂田郡米原(まいばら)町番場(ばんば)【現在は米原市】に蓮華寺を訪ねた。蓮如のいう江州バンバ(番場)ノ道場、である。米原は、汽車の乗り換えにはよく使ったが、市街に出たのは初めてだ。寺地のある番場はかつての中山道の宿場で、長谷川伸の名作『瞼(まぶた)の母』の主人公・番場の忠太郎でなじみのある地名である。1333年5月9日に鎌倉幕府崩壊の端緒となった六波羅探題北条仲時以下432人が自刃した悲劇の古戦場でありその集団自決した場所こそが「番場の峠の麓の辻堂」すなわち蓮華寺であった。当時の住持・同阿良向(『一向上人伝』著者)がこのうち189名を記したものが国宝の『陸波羅南北過去帳』である。当寺で、一向上人の墓碑を私は拝してきた。—明治以降、時宗から浄土宗に改まったが、蓮華寺はいまもなお一向派の本山である。(蓮華寺はJR米原駅を降りたら大きな観光案内看板が立っているので、すぐに分かる)

3、一向上人のこと(ホームページ坂東王国、一向一揆戦線より引用)

さらに、一向上人のことについて詳しく知りたい方については、上記ホームページを見つけたので、一向上人の事項について紹介しておく。詳しくご覧になりたい方は、<http://www.ne.jp/asahi/hon/bando-1000/itki/iku2/202.htm> を見てください。

親鸞門流浄土真宗の徒が何故「一向宗」と呼ばれたり、また「一向一揆」といわれたりするのか、まずこの問題に触れておかなければならない。

元来、親鸞門流の浄土真宗以前から「一向宗」というのがあって、その開祖を一向上人俊聖(1239-1287)という。建暦二年に筑後国竹野荘西好田(福岡県浮羽郡田主丸町・久留米市)で生まれたが、たまたま時宗の祖の一遍智真と同年であった。六歳のとき書写山に上って天台教学を修めるが、十五歳で下山し南都に師を求めても得られず、二十歳にして東国へ下り、法然の孫弟子の然阿良忠に師事した。三十四歳で一派を立て諸国遊行の途についたというから、法然流浄土宗の一派であったが、『一遍流義十二派略記』には「一遍上人弟子一向上人住江州番場蓮華寺建一向流義」とある。

以後、九州・四国・中国・近畿を歩き、不断念仏を執行し、踊り念仏を修すという。「俊聖ハ髪ソルヒマモナカリケル 南無阿弥陀仏ノ声ハカリシテ」と詠い、衣の裳をつけず、念仏する時は頭をふり肩をゆりておどる、「一向弥陀一仏に限て、余行余宗をきらふ」というから、法然流浄土宗を一遍流時宗の形で布教したように見える。

また『一向上人伝』によると、四十五歳になった弘安7年(1284)の春、加賀国金沢の弥陀安置の道場にしばらく留まり踊躍念仏したところ、様々な男女がひしめきあって参集し結縁した。この盛況ぶりに他宗の僧ら三十人ばかり、一向上人を難詰しようとして道場に押しかけたが、かえって上人の教説に感じ入って多くがその門徒になったという。しかし金沢の地元では、金沢の地名の出る初見は天文十五年(1546)の「金沢坊舎」だから、鎌倉

時代まで遡れないとして、一向上人の金沢布教は承認していない。遊行聖の一遍時衆の徒にあっては、それでいいのだ。在家の保障あつての遊行であつたわけではないのだから。だが『一遍流義十二派略記』にあるように、近江国は中山道番場の宿場町に、付近の鎌刃城主土肥三郎元頼が一向上人に帰依し七世紀初頭に創建されその後焼失した蓮華寺を再興した。番場宿は長谷川伸の名作『臉の母』幕末やくざ番場の忠太郎の故郷である。墓地には土肥元頼の墓と伝える宝篋印塔、一向上人俊聖の墓、そして、おびたしい数の一石五輪塔が立ち並んでいる。元弘三年(1333)京都合戦に敗れた六波羅探題の北条仲時は鎌倉に向かう途中、番場で京極氏の軍に囲まれ、一向堂前で仲時ら432人が集団自決した場所こそ「番場の峠の麓の辻堂」すなわち蓮華寺であつた。

各地を遊行するのが時宗の徒であつたが、それでも引退すると寺に住むようになる。時宗の総本山、藤沢山無量光院、俗称遊行寺もその一つで、ここに一向上人像がある。こうした歴然とした「一向宗」があつたにも関わらず、とりわけ本願寺はいつも一向宗と混同されていた。既に本願寺三世覚如の『本願寺親鸞上人門弟等愁申状』によると、乾元元年(1302)ころ、一向衆と号して諸国を横行し、放埒な行為を働く輩が押しとどめられたとき、本願寺門徒をそれと混同してはならないといっている。一所不在・諸国横行の時宗の徒と違い、親鸞門流浄土真宗は開祖親鸞以来、在家信仰が基本的な姿勢であつた。

しかしこの頃より一向衆という呼称は、時宗一向上人の門徒よりも、むしろ親鸞門流を指すようになった。未だ禅と念仏が分かれていなかった時代である。「南無阿弥陀仏 決定往生六十万人」と刷った賦算札を六十万人に配ると願掛け、いっぺん札を見たら、いっぺん念仏称えただけで往生できると悟った一遍一行の放浪旅は、遂に往生決定の歓喜を全身で表す踊念仏となった。その喧騒さは、正に一揆の関の声さながらではなかつたのか。

一向一揆

文正元年(1466)近江国は琵琶湖の東岸、本願寺門徒が金森惣道場に決起して、史上最初の一向一揆は起つた。応仁の大乱が起る前年の事であつた。

事は前年正月に比叡山延暦寺山門衆徒の襲撃によって、大谷本願寺が破却されたことにはじまる。その頃、本願寺蓮如が八世法主を継いで十年、本願寺教線は急速に拡大、とりわけ近江国の琵琶湖周辺に多くの門徒道場とその信徒を獲得していた。それは本願寺の本所である山門の嫉妬と反感を買い、延暦寺西党の山法師が祇園社の神人を指揮して百五十人ばかりで襲つた。

表向きの理由は、本願寺蓮如が門徒たちに「帰命尽十方無礙光如来」と書いた本尊十字名号を与えて教化に務めたところ、山門は蓮如が「無礙光宗」なる一宗を勝手に建てたと曲解したというものであつた。従つて、この戦いは純然たる宗教戦争であつた。

急の報せで琵琶湖の西岸堅田の法住はじめ、近江国だけでも二百人余りの信徒が逢坂山を越えて駆けつけて御番をしていたが、油断を突かれて襲われてしまった。蓮如と子の実如は延暦寺青蓮院門徒の定法寺へ脱出したが、長子の順如は蓮如と間違われて捕まる始末であつた。結局、本願寺坊舎は解体されてしまった。本願寺はこの時以来十三年間、文明11年(1479)に蓮如が山科に本願寺を建立するまで本寺がなかつたのである。

蓮如は一端摂津へ脱出、近江へ戻つても琵琶湖西岸の堅田をはじめ各地に一夜二夜と転々とした。一説に、

そのころ蓮如の首に懸賞金が掛けられたともいわれる。そして、とりあえずの落ち着き先が琵琶湖東岸、野洲郡の金森惣道場であった。堅田の門徒たちも隠密に集まっていた。堅田と金森の位置関係は、現在の琵琶湖大橋の東・西端にあり、当時も西の坂本と金森の間に渡し舟の便があった。

金森惣道場は 金森の道西が蓮如の父の存如のもとへ足しげく通っていたころ、蓮如の法話を聴く機会を得て、金森に蓮如を招いたことが切っ掛けになって、金森の在所に本願寺派の信仰が根付いたという。道西の俗姓は川那邊氏という土着武士で、金森の「宰」の家柄にして外出には馬に鎧をかけ、茶の湯を常とするほど裕福であった。とはいえ金森惣道場は道西一人によるものではなく、門徒の共同運営であった。史上最初の一揆はこうした道場を根城に起こったのである。堅田の本福寺の記録は、金森惣道場を指して「城」と呼んでいる。江戸時代末の村絵図によると、境川の乱流する氾濫原のただ中にあり、しかもその水路を引き回して集落を囲った様子を伝えている。金森は既に環濠城塞だったのである。城塞に集まった門徒三百人余り、討って出て比叡山の衆徒日浄坊なる者を討取ったという。道場といっても茅葺で、火をかけられて、たちまち炎上した。茅葺だったのは蓮如の指示によるといわれ、このころの本願寺派の道場は皆同じ茅葺であった。そのとき燃え盛る道場から、木像本尊を背負った蓮如が敵の包囲網の眼前を走り出て、赤野井の慶乗の道場へ移したという。幕府の奉公衆松任上野介はこの事件を目撃して感嘆、蓮如に帰依したという。

しかし、緒戦の勝利にも関わらず、山門と事を構えることを嫌った蓮如の命令で、金森に籠もった門徒たちは散った。堅田に戻った門徒たちも、山門勢の襲撃を受け、あげくは堅田大宮の鴨神社の社人坂本将監の内部離反を招いた。堅田は山門の支配下にあると同時に、鴨御祖社(下賀茂社)の御厨でもあった。結局、堅田本福寺の法住は山門飯室の松善院が今堅田藤田の兄弟であるという伝によって仲介を頼み、堅田門徒は八十貫文の礼銭を堅田大宮へ払い、堅田の本福寺が延暦寺東塔北谷覚恩房の末寺になるという条件で在所へ帰ることができたのである。

そのとき飯室の松善院は、本願寺蓮如の活発な布教活動をもう三十年待ったならば、山門の勢いも衰えて本願寺もこんなに苦勞せずに済んだろう、布教の時期が少し早すぎたから門徒たちも苦勞するのだ、という感想をもらしたという。蓮如が本願寺第八代宗主を継いだのは四十三歳のときであり、このとき既に五十路にはいっていて、もう三十年も待てるはずがなかった。

それ故、本願寺蓮如もまた、上洛していた三河上宮寺の佐々木如光の申し出た礼銭を支払うことで、山門の違乱を決着させることにした。青蓮院が仲介して、本願寺は長子の順如を廃して実如を嫡子として継がせ、西塔院北谷正教坊を実如の坊とし、同谷西覚坊を本願寺家宰の下間筑前の坊として、本願寺は山門西塔院の末寺として末寺役銭を三十貫文納めることで和談が成立した。本願寺の役銭は天文年間、蓮如の曾孫の証如の時代まで納入されていたのである。因みに、この時代の本寺と末寺の関係とは、江戸時代以降の様に宗派ごとに統制されておらず、宗旨が異なる関係でも実力主義で本・末関係が成り立っていた。……以下省略

詳しくご覧になりたい方は、こちらへ <http://www.ne.jp/asahi/hon/bando-1000/itki/iku2/202.htm> を

4、 浄土真宗が一向宗と呼ばれた意味は

すでに、ここまでお読みの方にはご理解されていることと存知ます。要は蓮如以降の本願寺が、一向衆の民衆を吸収して、本願寺教団として成長していったことと、本願寺の教えが、一向宗と混同されたことがあげられると思います。また当時は、明確に浄土真宗と一向宗、時宗あるいは浄土宗〇〇派といわれるような区別は民衆は認識していなく、真宗内でも本願寺と高田派などが争っていたように、民衆は、念仏する仏教はすべて浄土系宗教（本願寺も浄土宗の一宗派としか認識していなかった）としてしか理解しておらず、それゆえ、本願寺（親鸞・蓮如）の教団に抵抗なく多数（一部を除く）の民衆は参加していったのではないだろうか。一昔の喩えでいうならば、労働組合員が社会党や共産党に入党するようなものである。（労働者の生活を守ってくれる政党は社会党か共産党と思っていた時代が二重写しに重なればイメージできるかと思う。）

無量寿経・下巻には「一向に専ら無量寿仏を念じて・・・」とあります。

このような事から、ただひたすら（一向）に南無阿弥陀仏を唱える念仏を行うことが極楽往生への道であるとの教えが出てきても納得できるわけではありませんが、信（信心）の浄土真宗が一向宗と呼ばれたのは面白くもあります。

本願寺第八代の蓮如が御文章のなかで、「当流では一向宗とは言わない。弥陀一仏をひたすらに信じ、信心決定して真実報土に往生するのであるから、親鸞聖人は浄土真宗と言われた。一向宗とは余宗・他宗の人がこの宗をさしていることである」と言われています。ということは、もしかすると人から見ると浄土真宗は、ある意味では行の教えだと見られていたのではないのでしょうか・・・ただひたすらに南無阿弥陀仏を口にしながら、いわゆる一向一揆を起こしたことも誤解の元となっているのかもしれない。

しかし、思うに、ただひたすら南無阿弥陀仏を唱える念仏を行うと言うことで一向宗と呼ばれていたのなら、時宗や浄土宗のほうが一向宗の名に値するかもしれません。

ただ、「一向に二心なく弥陀を信ずる」（御文章）と言うことならば、浄土真宗が一向宗と呼ばれてもいたしかたありません。

語源的には、一向とは「心を一つのことに向けること。ひたすら」ということです。だから、一向宗とは「ひたすらに阿弥陀如来にすがることを宗旨とする宗派」ということになると思います。

一般には我々本願寺派の信者を門徒といいます。門徒は「この世で救われるには、念仏以外必要ない」と公言してはばからず、必然的に諸神諸仏を排除し、守護・地頭の権力をも否定します。こうした民衆と宗教者との連携団体を総称して一向衆といったと想像されます。先ほどの喩えでいえば、一向衆とは労働組合であり、本願寺に相当するのが社会党なり共産党ということだ。同じ念仏系であったがために、一向宗は独立した宗派として確立していなかった為に地域によっては浄土真宗に組み込まれたり、時宗と混同されたが、江戸時代から第二次大戦直後までは一向宗は時宗のなかの一向派として時宗に属して存続

して居たと聞きました。第二次大戦後に、一向派内部の意向や浄土宗の揺さぶりから時宗も含めて大部分は浄土宗へと移行し、現在に至っているということです。

さて、最後にこの話を物語風にまとめてしめたいと思います。以下の作品はゲーム「信長の野望」を製作している株式会社コーエーから、「本願寺光佐と一向一揆」の項を拝借しました。

「人」は昔から、次の3つのものに支配されてきました。「政治」、「軍事」、そして「宗教」です。

政治による知の支配や、軍事力による力の支配よりも、宗教による「心の支配」のほうがより強く人を引き付ける事が出来るのは、現代の世界や事件などを見ても明らかです。

さて、戦国時代にも、そんな宗教の力によって人々を統率・支配していた勢力が存在します。それが「**本願寺家**」なのですが… 本願寺家は元々、仏教の「お寺さん」です。そんな「本願寺家」とは、いったいどのような存在だったのでしょうか…？

それを語るには、まず「**一向宗**」という宗教について説明しなければなりません。

「一向宗」とは、仏教の「**浄土真宗**」の事を指します。（これは世間での認識の話）

「浄土真宗」とは、「親鸞」というお坊さんが広めた仏教の教え（宗派）の1つで、「**南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）**」と唱え、仏に身を任せれば、全ての人が、例え悪人でも、極楽浄土へと成仏することが出来る、という教えです。

厳しい修行や悟りを必要とするのではなく、南無阿弥陀仏の念仏を唱えるだけで極楽に行けると言うこの教えは、一般の民衆を中心に日本全土に大きく広まっていきました。

この浄土真宗が創始されたのが、戦国時代から約 300 年ほど前の、西暦 1250 年ごろになります。

「一向宗」は、一般にはこの「浄土真宗」と同じとされていますが、しかし戦国時代に流行した「一向宗」は、本来の浄土真宗とはかなり違う性質を見せています。

よってここでは、その「一向宗」は「浄土真宗」とは別な宗派で、同じ法然上人の浄土宗から派生した別の宗教として説明しましょう。・・・これが本旨なのだ

「一向宗」は、天台や真言など他の宗教と大きく違う点がありました。

それは通常の宗教（仏教）が、僧侶が信者に対して救済や教えを与えるのに対し、「一向宗」では一人一人の信者が、他の人々や信者に対して救済を行う事を認めていた点です。

「救済」と言っても物理的に助けてあげる訳ではなく、ただ「祈ってあげる」だけですが… 科学が未発達であり、多くの迷信や神・仏のご加護が本気で信じられていた当時、それは非常にありがたいものでした。

南無阿弥陀仏

また、「信じるものはみな兄弟」という、今では良くある宗教の思想も、日本ではこの一向宗から始ったもので、僧も含めて信者同士がみんなで協調しようという考えがありました。

こうした、信者個人による布教活動が認められていた事と、信者が「祈り」によって他の人を「幸せにしてあげられる」こと、そして信者同士のコミュニティーを形成する考えがあった事で、一向宗は戦国時代に爆発的に普及していく事になります。

言わば、最近の「新興宗教」のハシリだったと言えますね。

加えて、戦国時代は各所で戦乱が巻き起こり、多くの人々が不幸に晒されていた時代です。

こう言った世の中には、それでなくても人々は**神や仏に救いを求めます**。

つまり一向宗の流行は、当時の社会現象の一つでもあったと言えるでしょう。

さて、「本願寺家 = 光佐」についてですが…

「本願寺」というお寺は、現在の**浄土真宗の「総本山」**のお寺です。

当時は「浄土真宗 = 一向宗」と思われていたから、つまり本願寺は一向宗のトップであった訳（民衆はそのように理解していた）です。本来の一向宗や時宗の念仏系門徒を含んだ爆発的な流行下で、同じ念仏系の仏教として本願寺も日本各地に本願寺のお寺が建てられていきました。

「本願寺」はそうしたお寺に「坊官」と呼ばれる信者の統率・指導を行う僧を派遣していました。同時に信者から「お布施」を集め、それらによって本願寺は日本各地に大きな支配力を持つ存在となっていくます。

もともと当時の「寺社」というものは、周辺の地域に大きな影響力・支配力を持つ存在であったため、一向宗や教団の拡大によって本願寺が「寺社勢力」の中心となる地域も数多くなっていきます。ですが、戦国時代の初期の「本願寺」は、それでもあくまで「お寺さん」であるに過ぎませんでした。決して他の大名家のように、「武力」を使った活動をしていた訳ではありません。

しかし…一向宗やその他念仏教団のあまりに大きな普及により、熱狂的な信者の中から、「**独立して一向宗の国を作ろう！**」という動きが出始めます。

国を「**仏法領（仏の治める国）**」とする事で、さらに多くに人々に仏の教えを広めて救済し、そして国に納める多額の「税」を「お布施」とする事で、さらなる仏の加護を得よう、という考えです。

しかしそれは同時に、いま国を治めている統治者を武力蜂起によって追い出し、**国を乗っ取る**という過激な思想でもありました。

一方、本願寺は当初、こういった「**自治・独立**」の動きを抑えようとしていました。

本願寺の浄土真宗の教えには「**王法為本**」というものがあり、これは「現在の王（統治者）に従い、政治と秩序を助けることが仏法の道である」という考えで、つまり一向宗の「**独立**」の動きとは全く**正反対**のものです。

このことから当初、完全には「**本願寺・浄土真宗 = 一向宗**」ではなかった事が伺えます。

しかし、一向宗門徒(信者)の独立・自治の動きはどんどん大きくなっていき、ついに「加賀(現在の石川県金沢市周辺)」で、一向宗の僧と門徒達による大規模な一揆が勃発します！

このような一向宗による一揆を「**一向一揆**」と呼びます。

そして数十万という門徒(信者)によって加賀の城は陥落、加賀の国主は自害し、なんと本当に、一向一揆による「一向宗の国」が誕生してしまいます！

こうなるとますます一向宗門徒の「独立・自治」の動きは強まり、**各地で大名や権力者との対立・抗争が始まります。**

大名家によって一向宗への対処は異なりましたが、特に一向宗との対立が大きかったのは「上杉家」、「朝倉家」、「徳川家」、南九州の「島津家」などです。

特に、朝倉家は加賀の隣の国だったため、30万人と言うものすごい一揆の大軍に侵攻され、また徳川家は独立したばかりの頃に、一揆軍に城を包囲されて窮地に陥っています。



総本山の「本願寺」ではこうした門徒の過激な動きを「王法為本」に従って抑えようとし続けましたが、一度火の付いた一向宗の熱狂ぶりと、「独立・自治」の動きは抑えきる事が出来なくなってきます。それどころか、本願寺に対する門徒の不満も広がっていきます。

「俺達是一向宗のためにこんなにがんばって戦っているのに、どうして本願寺はそれを認めようとしなんだ！」という訳です。

さて、そんな頃・・・ 戦国時代に一人の男が登場しました。「**織田 信長**」です。

彼は尾張・美濃を拠点とし、「**将軍・足利義昭**」の後ろ盾を持って京都を制圧、広範囲を支配下として戦国時代の覇王となりました。

当初 本願寺は、「王法為本」に従って、信長に従う姿勢を見せていました。

信長が京都を制圧すると、法主(教祖・法王)の「**本願寺 顕如**」が自ら進んで信長に挨拶に行き、その後 信長 からいきなり 5000 貫 の資金提供を要求された時も、これにすぐに応じています。しかし、信長の本願寺への要求はどんどんエスカレートしていきます。

信者の動きは逐一織田家に報告しろ、本願寺が指令を出す際には織田家の許可を求めろ、勝手に他の大名家と交渉してはならない、などの要求が繰り返され、さらに、大阪の「石山」という場所にあった本願寺の重要な拠点「**石山本願寺**」の開け渡しも要求されます。

信長としては、潜在的な脅威である本願寺を押さえておきたいという考えがあったようですが、本願寺としても、これらの要求を受けていては独自性は失われ、ただの織田家の部下となってしまう。それに加え、一向宗の「独立・自治」の動きを認めて欲しいと、各地の門徒や僧から突き上げを受けるようになり、さらに 信長 によって京都に復帰した「**将軍・足利義昭**」からも、義昭 が 信長 と不仲になったことから、「信長を討て」という要求を受けるようになります。こうした事があり、ついに 法主・本願寺 顕如 は、時の権力者「**織田 信長**」に対し、**反旗を翻す事**を決意します！「**仏敵・信長を討て！**」の檄文を各地に飛ばし、「**仏法の灯火を**

守るため、織田家と一向宗に敵する者と戦え！ 従わぬものは破門する！」とまで言い切ります！

これにより、「王法為本」の制約を解かれた各地の一向宗門徒は一斉に武力蜂起、各地で一向一揆が巻き起こります。さらに 本願寺顕如 と本願寺の高僧達は大阪の「石山本願寺城」に多数の僧兵と共に入城、そこで籠城戦（城にこもって戦う事）の用意をします。さらに、紀伊半島の南部一帯を拠点とする一向宗と友好的な勢力「雑賀衆」に救援を要請、多数の鉄砲を持つ職人集団であり、傭兵集団でもある彼らからの武力援助を受けると、織田家と敵対している中国地方の大大名「毛利家」とも同盟し、毛利家の水軍「村上水軍」から、海上輸送ルートで物資の補給を行います。



それは、仏教の「お寺さん」であった本願寺が、武装宗教集団「本願寺家」に変わった瞬間でもありました。

これらの動きに対し、すぐに 信長 も本願寺討伐の兵を向かわせます。

しかし、石山本願寺城の攻撃に向かった織田軍は、本願寺側の一向宗門徒と僧兵によって手痛い反撃を受け、さらに 雑賀鉄砲衆の奇襲を受けて壊滅。一方、尾張のすぐ西の「伊勢地方（三重県）」では、「長島一向一揆」と呼ばれる多数の一向宗門徒の武力蜂起によって織田軍は撃退され、その周辺が征圧されてしまいます。

石山本願寺城で籠城する本願寺の軍勢を弱体化させるため、織田軍は石山本願寺城への海上輸送ルートを攻撃しますが、これも毛利家の村上水軍に撃退され、信長は各地で後退するハメになります。

「進むは極楽、退けば地獄」と鼓舞され、「南無阿弥陀仏」の経文を唱えながら死をも怖れず攻撃してくる一向宗の軍団は、霸王たる織田の軍勢にとっても恐るべき相手だったのです。

そこで 信長 は、各地の一向宗の勢力を、個別に潰していく作戦に出ます。

本願寺の挙兵から1年後、織田軍は京都の近くにある仏教の総本山の1つ「比叡山・延暦寺」に大軍を持って侵攻、神社仏閣を全て焼き払い、そこにいた僧侶3千人を殺害します。

「比叡山」は一向宗や本願寺とは直接関係ありませんが、その独自性を保つために織田家に従おうとせず、早くから織田家と対立する姿勢を取っていた仏教勢力でした。

そのため 信長 の侵攻を受けたのですが、ちょうど本願寺によって織田軍が敗退した後だったため、その怒りの矛先が向いたのかもしれない、また一向宗門徒への見せしめだったのかもしれない…

進者往生極楽
退者無間地獄

その後、信長 は近畿地方の反織田勢力「**浅井家**」や「**朝倉家**」を滅ぼすと、伊勢地方の「**長島一向一揆**」に再度攻撃を開始。

一向一揆側もかなり善戦しますが、大軍の前に圧倒され、そして捕らえられた**門徒2万人は女子供も含め、全て虐殺**されます。

さらに、一向宗によって制圧されていた近畿地方の北方の「**越前**」の国に侵攻、ここでも一向一揆の軍勢を圧倒すると、捕らえた門徒は全て惨殺するという苛烈さで、その犠牲となった門徒は**7万人以上**とも言われています。

この時期に殺された 一向宗門徒 は十万人を超えと言われており、それは広島・長崎に落とされた原爆の死者に匹敵するもので、日本史上における最大規模の虐殺であった事は間違いありません。これらの所業により、いつの頃からか 織田信長 は「**第六天魔王**」と呼ばれるようになります。ただ、信長の側にも、彼等を虐殺しなければならない理由はあったようです。

なぜなら一向宗門徒は、「宗教」による**信仰**によって結束している者達。彼等が自らその信仰を捨てない限り、例え戦いに破れようと、国が滅びようと、彼等が屈服することは絶対にないからです。

信長による門徒の殺戮と、それによる織田軍に反抗することの恐怖によって、次第に各地の一向一揆はなりを潜めていきました。「宗教」は、信者がいなければ意味がありません。

それに、もともと本願寺の武力のほとんどは、各地の一向宗門徒による「一向一揆」でしたから、これが沈静化したことによって徐々に本願寺はその力を失っていきます。

「反織田」の有力勢力だった 武田 信玄、上杉 謙信 も相次いで病死。

将軍・足利 義昭 も追放され、さらに織田家で建造された最新技術による鉄張りの軍艦「**鉄甲船**」によって、石山本願寺城 に海上補給をしていた 毛利家 の 村上水軍 も敗退。

一向一揆によって作られた一向宗の国「**加賀**」も制圧され、こうして孤立した本願寺は、ついにその挙兵から約10年後、**織田家に降伏して 石山本願寺（城みたいな寺？）から退去**。

本願寺家による武力闘争は幕を閉じたのでした。

その後、法主・本願寺 顕如 は 信長に助命されると再び「**王法為本**」を元に、各地の一向一揆を抑える役割を持つことになります。



各地の一向一揆もこれを契機に徐々に収まり、こうして戦国の世に巻き起こった「一向一揆」の嵐は、終息することになります…

信長に降伏する際、法主「本願寺 顕如」の子、「**本願寺 教如**」はそれに反対、石山本願寺城 から退去しようとしなかったため、勘当されることになります。

しかし徹底抗戦を訴える 教如 は一部の熱狂的な 一向宗門徒 に支持され、これが結果的に本願寺家の分裂を生み、「**西本願寺（顕如派）**」と「**東本願寺（教如派）**」に分かれる事となります。しかし、この両本願寺はその後「浄土真宗」の総本山として存続し続け、そして現代にも続いています。

本願寺のお寺は日本中にあるので、行った事がある人も多いかもしれませんね。

一向宗門徒のほとんどは「農民」(・・・私の理解では非定住非農耕の民が大勢参加している)です。

力の弱い、虐げられた彼等が一向宗の信仰を通して望んだものは、支配からの解放でした。

しかし、そんな彼等を統率しようとした「本願寺」もまた、彼等にとっての「支配」に他なりません。その事実が表面化したとき、一枚岩であったはずの一向宗に、亀裂が生じます。

ですが悲しい事に、統率のない集団は、「烏合の衆」に過ぎません。自由と信仰を求めた彼らの戦いは、力と支配によって、打ち破られる運命だったのかも知れません・・・

5、用語と解説

国立国会図書館データベースから用語辞典で検索(コピペしています)

一向衆(いっこうしゅう)

中世の日本を席卷した民間念仏信仰集団。初期の重要な芸能伝播者(中世被差別民＝賤民層)と考えられる。

一向宗は念仏信仰宗教者の集まりである。

「一向」は「ひたすら」とも読み、「ひたすら阿弥陀仏の救済を信じる」という意味。このため法然親鸞以来のいわゆる鎌倉仏教の「専修念仏」(念仏以外の信仰を排する信仰)の一派と考えられがちである。しかし、実態は密教・修験道との交流があって山伏なども含まれ、また祈祷や呪術など民間信仰の「雑修・雑行」を業とする人々もあり、けっして「専修」ではなかった。中世一般民衆は、「専修念仏」の宗教思想よりも、念仏や念仏僧のもつ「呪術力」(死霊鎮送など)を求めている。

一遍と同時代の鎌倉時代末期、一向上人といわれた 一向俊聖(1239-1283)による踊り念仏の信仰集団が形成された。しかしこれは歴史上の「一向宗」とは別である。歴史上の一向宗は、この一派のほか本願寺、時衆などの他の念仏教団とも同一視されるような広がりを持ち、いわば中世の民間念仏信仰集団のベースを形成するような位置にある。

中世末期の「本願寺」と「一向宗」はこれまで同一視されることが多かったが、近年の研究によると両者はイコールではない。これは本願寺の蓮如は、教団構成員が「一向宗」を名乗ることを禁じていることから明らか。しかしこうした本願寺指導層の思惑とは別に、実態として「一向宗」の人々は本願寺教団のベースに深く交わっていたと考えられている。盆踊りとの関係で注目されるのは、この一向宗の中に、山伏や遍歴の芸能者など、念仏芸能の伝搬者が多数含まれており、彼らが全国への盆踊りの普及に大きな役割を果たしたと考えられる点である。

一向宗の実態を直接示す資料は少なく、さらなる実態究明が待たれる。

いっこうしゅう【一向宗】

元来は時衆(宗)の呼び名であったが、浄土真宗が、阿弥陀一仏に帰命するので、他宗から浄土真宗の俗称として用いられるようになった。しかし蓮如上人は、一向宗という呼び方は決して浄土真宗の側から言わないと誠められている。一向衆(時宗一向派)との混同もみられる。

いっこうせんじゅ【一向専修】

阿弥陀一仏の本願を信じて、ひとすじに専ら念仏の一行を修すること。

いっこうせんねん【一向専念】

専ら阿弥陀仏の本願を信じて、専らその名号を称念すること。一向専修と同意。

踊り念仏(おどりねんぶつ)

学術用語としては、「踊り念仏」と「念仏踊り」は区別される。

「踊り念仏」は踊り手自身が鉦を叩き、和讃や歌を歌う芸能。一方「念仏踊り」は、踊り手と歌い手が分かれたもの。

「踊り念仏」は念仏、つまり信仰的側面が基本となるもの。一方「念仏踊り」は踊り、すなわち芸能・娯楽的側面を中心とするものという区別もある。一般に時期が下るほど芸能・娯楽的側面が強くなると考えられる。

歴史上の「踊り念仏」には、以下のようなものがある。

空也の踊り念仏

融通念仏の踊り念仏

一向の踊り念仏

一遍の踊り念仏

時衆踊り念仏

時衆／時宗(じしゅう)

一遍上人(一遍智真：1239 - 1289)の開創した、鎌倉新仏教の宗派の一つ。宗派としては時宗と呼ばれ、その構成員は自らを時衆と称した。時衆の宗教儀礼である「**踊り念仏**」は、盆踊りの誕生にきわめて大きな意味を持つ。

時衆の特徴は、宗教的儀礼として「踊り念仏」を盛んに催したことと、開祖一遍をはじめ時衆が全国を漂泊回遊(＝「遊行」)する**遊行聖**として布教につとめことである。その足跡は陸奥から薩摩まで文字通り全国におよび、結果として踊り念仏が全国の念仏系踊り芸能の母体となったと考えられる。中世賤民の代表である河原者や散所者、とともに鉢たたき(時宗系下層宗教者)が入っていることに留意。彼らは念仏聖、時宗聖ともいい清目、埋葬などもしており、中世の教団の実態は閉鎖的なものではなく、芸能・宗教・商工業と

係わり構成員は被差別民衆が大半で「一向宗」とも深く交じわるものであったらしい。

歴史的には、時衆は先行する**融通念仏**の念仏信仰をベースとしている。

一遍自身「融通念仏勧むる聖」と言われ、融通念仏者であった。一遍はたくさんの人を集める集客手法を融通念仏から学んだ。彼が人々に配った「南無阿弥陀仏六十万人決定往生」の札は賦算札（ふさんふだ）と呼ばれるが、この賦算という方式は融通念仏が得意とする集客手法であった（この札は現在でも藤沢遊行寺で遊行上人により配られている）。

一遍が取り入れた踊り念仏も、実はすでに融通念仏が芸能としていたものであった。しかし、中世中～後期における踊り念仏の全国的普及には、やはり一遍と時衆教団の貢献が大きいと考えられる。

一遍の死後、14世紀末から15世紀に全国的に教線を伸ばしたが、16世紀には衰退して本願寺教団などに拠点を奪われることもあった。注目されるのは、中世時衆の拠点が**都市的な場所**であったことであり、時衆遺跡の存在は中世都市の指標の一つにもなっている。たくさんの人への布教を目指す時衆は、必然的に都市的な場所を拠点に選んだ。踊り念仏から盆踊りへの変化を考える上でも、中世都市問題への注目が必要となる。

中世の時衆はまた、死者供養・鎮送の役割も担っていた。戦国時代、時衆はしばしば戦場に現れて戦死者の供養を行った。この際に催された大念仏や踊り念仏が、後の盆踊りに発展する契機となったと考えられる。

江戸時代になると、時衆は幕府により統制される。全国を巡回する「遊行上人」と、引退後の「**藤沢上人**」の両頭体制であった。

一遍上人の事績を伝える史料としては、弟子聖戒と絵師円伊による「**一遍聖絵**」と、二祖他阿真教の「一遍上人絵伝」が有名。史料的价值が高いのは「聖絵」である。平成15年春の研究で、聖絵における一遍はもともと全裸で描かれていたことが判明、徹底した「捨聖」（すてひじり）としての姿が明らかになり、関係者に衝撃を与えた。

○参考引用として・・・時宗とは鎌倉時代における浄土経の一宗派で信心のないものや下層階級のものでも等しく救われると説き（教義については真宗もあまり変わりません）、全国に救済のお札を配り、踊り念仏により人々の心をとらえ、庶民に至るまで爆発的な人気を得た宗教です。開祖の一遍は寺をもたず、宗派をたてず、生涯を遊行で過ごしました。

一遍上人は豪族・河野通広の子供として延応元年(1239)に宝巖寺の地に生まれました。13歳の折、太宰府の聖達に12年間浄土門を学びましたが、25歳の時、父通広が死亡、帰郷して還俗します。しかし、32歳で再出家し、33歳の春、善光寺に参り、二河白道図を写し、この図を本尊にして修行し、誰でも一度の念仏により往生し、仏になれるという悟りをひらきます。さらに弘法大師の道を慕い、久万の岩屋寺にこもり、捨て聖の道に入ります。全身全霊を込めた一回の念仏により人は仏になれるという「一遍の念仏」をすすめ、札くばりを行います。正応二年(1289)51歳で兵庫観音堂で没するまで遊行を繰り返します。人々に念仏をすすめ、魂の救済をすすめるために全国を行脚したのです。

札くばりと踊り念仏により爆発的な帰信者を得、北は江差から南は鹿児島まで多くの庶民と接した時宗はまさに民衆の宗教でした。

一遍は和歌にも堪能で「一遍上人語録」に約 70 首、連歌は「菟玖波集」に発句が掲載されています。また、「一遍上人縁起絵」や「一遍聖絵」など多くの説話や逸話、奇跡が描かれています。

声明(しょうみょう)

仏教の声楽。節にのせてお経などを唄ういわば男声合唱。

声明は、すでに奈良時代に南都（奈良）の諸寺にある程度伝来していた。

平安時代になると、天台宗延暦寺の僧円仁（794-864）によって、中国で発達した「うたう念仏」といわれる声明の一種「五会念仏」（ごえねんぶつ）が伝えられ、わが国における声明発展の基礎を築いた。日本における声明を大成したのは、良忍（1072-1132）である。

良忍は比叡山の下級僧である堂僧（常行三昧堂などの施設で声明に乗せて念仏を勤行する僧）をつとめ、親鸞の遠い先輩にあたる。のちに下山し、当時「聖」（ひじり）たちの一大拠点であった京都大原に入って来迎院を開創。各地の声明をほとんどすべて吸収しわが国の声明を大成したという。現在も大原は「魚山（ぎょざん）流」声明の本拠地として有名である。

良忍はまた融通念仏の創始者でもある。

多くの念仏聖の集まる大原で、声明のような音楽を採り入れた念仏芸能が成長し、後の踊り念仏のベースになっていったものと考えられる。後の六斎念仏などの念仏芸能の念仏歌詞には、「ゆうづうねんぶつ なむあみだぶつ」といった歌詞が含まれ、また曲調には「ユリ」「ソリ」「アタリ」などという声明由来の節回しが残されているという。

このように声明は、後の盆踊り音楽はじめ日本民謡の音楽の源流となったと考えられている。

称名／唱名(しょうみょう)

念仏の一種。「阿弥陀仏」の名前を口に出して唱えること。南無阿弥陀仏。

仏教の修行法的一种だが、その簡易さにより庶民の間にも広く普及した。

初期の盆踊り（念仏踊り）では、小歌を利用する前はこの「南無阿弥陀仏」を節にのせて唄っていたと考えられ、全国の念仏芸能にその痕跡を見ることができる。

融通念仏(ゆうづうねんぶつ)

良忍を始祖とする念仏信仰。

ちなみに「融通念仏宗」は江戸時代になって成立したもので、良忍の始めたものとは別である。

融通念仏とは、「うたごえ運動」（五来重）であるという見事な説明がある。

融通念仏は、「一人一切人 一切人一人」(ひとり全員のために、全員は一人のために)というスローガンのもとにつくられた念仏信仰者の共同体。名帳に登録されて参加者になると、過去・現在・未来にメンバーの唱えたすべての念仏の功德を、すべての参加者が得られるというもの。

融通念仏では、多数の参加者が一斉に念仏を唄う集会「融通大念仏」をしばしば開催した。このとき念仏にあわせてうたうメロディーに、良忍の得意とした声明などの音楽が導入されたと考えられる。

のちに融通念仏からは六斎念仏の「うたう念仏」(居念仏)と「踊る念仏」(立ち念仏)が発展し、「うたう念仏」は盆踊り歌の、「踊る念仏」は踊り念仏や盆踊りの源流となったとする説がある。

融 通 念 仏 宗

良忍(1072~1132)は、比叡山で学んだ後、阿弥陀如来により「自他融通の念仏」を受けて開祖する。自他の念仏が相互に影響しあって莫大な功德となり、この功德を受けて速やかに往生できる、と説く。融通念仏とは本来合唱の念仏であったという。良忍は仏教音楽である声明の集大成者として有名である。天台宗から独立して一宗として認められたのは江戸時代で、総本山は大念佛寺(大阪)です。

時 宗

一遍(1239~1289)は法然の高弟、証空門下の聖(ヒジリ)たちに学び、「捨聖」と呼ばれる。遊行をこととし、門弟も一遍に従い各地を遊行する。彼ら是一念の信を起こし念仏を唱えた者に札を与えたが、これを「賦算(フサン)」と言う。また一度の念仏で極楽浄土できると約束された喜びを表現したのが「踊り念仏」で、興奮の末に煩惱を捨て心は仏と一つになると民衆に勧め、時衆と呼ばれた。総本山は清浄光寺(神奈川)。

遊行(ゆぎょう)

全国各地を漂泊する宗教行為。遊行する宗教者を「遊行聖」と呼んだ。一遍ら時衆が代表例だが、中世には高野聖など多くの遊行の宗教者があらわれ、念仏信仰とともに踊りの芸能伝播にも大きな役割を果たした。

盆踊りの胎動（中世前～中期）

この時代・・・

「鎌倉幕府」が成立し、政治・経済・文化を独占していた貴族に代わり、武士が権力を握る「封建時代」が始まりました。そして庶民が台頭しはじめるのがこの時代です。

南北朝

地方実力の時代

都市の発達 京では、14世紀以降町衆という地縁集団が次第に成長

宗教

この時代の宗教は仏教、特に「念仏信仰」を軸に大きな動きを見せました。近年では、鎌倉時代の仏教界の中心勢力はいぜんとして奈良・京都の旧仏教であったことが定説となっています。しかし、少数派・異端とはいえ、庶民のための宗教（「鎌倉仏教」）が登場し、確実に広まり始めたのもまたこの時代です。そして、庶民派仏教の代表格が「念仏信仰」です。また仏教の浸透にともない、仏教系の年中行事としての「盂蘭盆会」も、ひろく定着しました。

芸能

日本芸能史の「一大転換期」といえるこの時期。後の盆踊りにつながる重要な動きが見られました。

文化 貴族から庶民へ

第一に、中世を通じた風流が 第二に、盆踊りの母胎となる芸能（踊り）と信仰（念仏）の結びつきが見られた。それが、以下に紹介する「融通念仏」や「踊り念仏」です

融通念仏 うたごえ運動

この時代には、やはり踊り念仏と近い念仏信仰の一つである「融通念仏」もたいへん盛んになりました。

・仏教の合唱音楽である「声明」の大家「良忍」（ろうにん）を始祖とする「融通念仏」

・「うた」「集団でうたう」という集団的パフォーマンスが注目。「うたごえ運動」（五来重）と言われるように、

踊り念仏 ～踊る宗教～

盆踊りの直接の母胎となり、後の多くの民俗芸能の起源となったのが「踊り念仏」です。

踊り念仏は、「念仏信仰」という宗教面と、「集団での踊り」という芸能、パフォーマンス面とを結びつけたもので、鎌倉時代の宗教家「一遍」が広めたことは広く知られています。

「踊り」という点で注目。

- ・ただし、実際は空也系の踊り念仏を一遍が取り入れたと考えられている。
- ・念仏は、早くから鎮魂儀礼・呪術（空也）
- ・念仏・和讃を唱えながら踊るものだった
- ・「ナムアミダブツ」六字名号に節をつけた「詠唱念仏」をうたいながらおどるものだった。

念仏信仰の広がり

- ・こうした念仏信仰を広めたのは、「聖」といわれる下級宗教家たちでした。
- ・代表格「時衆」の活躍とともに、全国に普及。

時衆は、まさに念仏信仰の代表的集団。知られていた「死穢（しえ）」を扱う特殊技能者集団でもあった。＝鎮魂 戦場に

全国に念仏信仰や踊り念仏を拡大・普及していった。

・同じ念仏信仰を持つ人たちは、集まって「念仏講」という信者集団を組織し、念仏信仰を実践するとともに様々な芸能の受け皿となっていきました。これら時宗や一向宗を支えた中世念仏民衆は、後年には、浄土真宗や浄土宗に吸収されていくのである。

浄土真宗

親鸞(1173～1262)は、比叡山で学んだ後、法然の弟子となる。そして法然の説く浄土門の念仏の教えこそ真実の教え(浄土真宗)とし、信心に徹し、信が定まったとき必ず正定聚ジョウジョウジュ(仏となる仲間)に入り、往生以前にこの世で救いが成就するとの立場をとる。そして、信心も念仏も如来より施与(セヨ)されたものとする絶対他力の教学を完成。親鸞自身も妻帯し、



出家教団とは異なる非僧非俗の教団を形成しました

が、これが現世の浄土真宗系の基となる。

「一向宗」とは浄土真宗に対し他宗派がつけた俗称。15世紀に代8代本願寺蓮如(1415～1499)が現れ、布教を展開、本願寺を大教団とする基礎を築くとともに多くの御文(手紙)を残す。その後、元来の本願寺系統が現在の浄土真宗本願寺派(西本願寺)となり、徳川家康に保護されて代12代教如(光寿)が復職し建てたのが真宗大谷派(東本願寺)となる。

●中興の粗、蓮如の登場・・・一向一揆との関係で特に詳細に解説

応永二十二年(1415) 存如の長男に生まれたのが蓮如で布袋丸と名付けられた。蓮如の生母は、貧しい本願寺の下働きをつとめる身分が低い女であった。応永二十七年、蓮如の父存如はしかるべき家の女如円を正妻に迎えた。そのため、蓮如の母は身をひかざるを得ない立場となり、わが子の肖像画『鹿子の御影』を描かせて本願寺を去っていった。(中略) 蓮如が生きた時代は中世の争乱期であり、蓮如は親鸞聖人の教えを分かり易く噛み下した教義を背景とし、不屈の闘志で布教活動に邁進したのである。蓮如の教えは熱っぽく分かりやすく、乱世に望みを失った多くの庶民に受け入れられ、本願寺教団は日本全国へと広がっていった。しかし、寛正六年(1465)比叡山の襲撃によって大谷本願寺を破却された蓮如は京都を逃れ、近畿各地を転々としながら布教活動を続けた。(中略) 吉崎に腰をすえた蓮如は、精力的に布教活動を展開する。北陸の地は本願寺派のみならず他派の勢力が強く、また本願寺派の僧たちも異端の教義を信奉しているという状態にあった。

親鸞の没後、浄土真宗は本願寺をはじめ、高田派・仏光寺派などに分かれて、それぞれが宗祖親鸞の教えを広めていった。ところが乱世のなかで、親鸞の残した教えを庶民が受け入れやすいようにゆがめ、本願寺の貧しさをよそに大いに繁盛するところも出てきた。たとえば、仏光寺は京都はもとより山陽・山陰・北陸にまで勢力を伸ばし、門前市をなす盛況ぶりであった。仏光寺は寺の坊さんを仏の化身として、坊さんにしたがって信心すれば極楽往生まちがいなしと教えた。さらに「名帳」「絵系図」を考案して、これに名前や絵を書けば極楽往生が約束されるとした。当然、名前や絵を書いてもらうには金銭や物品をより多く寺に捧げることが必要となり、それが、仏光寺繁盛の仕掛けであった。

親鸞は阿弥陀仏の前では一切の人間のはからいをすてて、ただ「念仏」することだけを説き、真実の「教」「行」「信」「証」(親鸞の「教行信証」はほとんどが仏教経論からの引

用で成り立っている)のすべては阿弥陀仏からくださるものだとした。そして、「偶像崇拜」をすることはなかった。それは蓮如も同様であり、蓮如は親鸞の教えをゆがめる同門の寺院を異端とし、正しい親鸞の教えを広めようとしたのである。

蓮如は本願寺派の教説を簡単な漢字と、カタカナ交じりでのわかりやすい文章に認め、門徒衆や僧あてに送った手紙を送った。「お文(御文書)」とよばれ、現代でいうところの通信教育であった。このような蓮如の布教活動は着実に浸透していき、庶民の支持をえてその精神的支柱となり、浄土真宗の教えは燎原の火の如くに広まっていったのである。

蓮如の説く教えによって結ばれた門徒たちは、やがて一揆を結び、ついには武士たちの支配に抵抗を示すようになった。長享二年(1488)蓮如による教勢拡大を背景に加賀一向一揆が起こり、加賀の本願寺教団は守護の富樫氏を追い、「百姓の治める国」といわれる状況が生まれた。その体制は、天正八年(1580)までのおよそ百年間続くことになる。

もっとも蓮如は門徒たちの武装蜂起に反対であったようだが、門徒たちの勢いを抑えることができなくなった。苦悩する蓮如の姿を目の当たりにした息子たちも危機感を抱き、大津にいた長兄にして次期宗主と目される順如を呼び、順如から蓮如に話をしてもらった。長男順如の諫言をいれた蓮如は、文明七(1475)、ついに吉崎退去を決意し、京都に戻っていったのである。京都に戻った蓮如は山科に本願寺を再建し、北陸には二度と戻ることはなかった。そして、明応八年(1499)八十五歳で大往生を遂げるまで精力的な活動を続けた。蓮如の長男順如は父に先立って死去したため、蓮如のあとは実如が相続した。

● 蓮如の誤算と苦悩



本願寺教団は、蓮如の時代に一大飛躍をとげ、大教団に発展した。それは、蓮如の布教の的確さによるものとはいえ、当時、政治・経済的に成長する時期を迎えていた庶民が、自分達の行動の思想的拠り所として、真宗を選んだことが教団発展の要因となった。

次第に拡大していった本願寺教団は、蓮如の思いをよそに、蓮如を頂点としてその下に一家衆寺院、その下に大坊主分や寺院道場がつまり、門徒はその底辺にあった。いいかえれば蓮如の存在を神格化し、封建主義形態を見せるようになったのである。吉崎に集まる門徒は蓮如を生仏として拝み、それを蓮如が否定すればするほど、蓮如のカリスマ性は強められていった。

門徒たちは「われは信心を得たり」といって往来を闊歩するようになり、武家を領主にして苛酷な支配を受けるより、坊主を領主としてわがままをいった方がよいと考えるようになり、それが一揆へと発展していったのである。それは、革命というものではなく、単純な奪権闘争であった。肥大化した本願寺教団は、すでに蓮如をもってしても制御不能状



上；親鸞 下；蓮如

法然

親鸞 (真宗義)	弁長 (鎮西義)	証空 (西山義)
隆寛 (長樂寺流・多念義) …… 衰退	良忠	淨音 (西谷流)
幸西 (一念義) …… 衰退	尊観 (名越派)	立信 (深草流) …… 衰退
長西 (九品寺流) …… 衰退	性心 (藤田派)	証入 (東山流) …… 衰退
源智 (紫野門徒) …… 浄土宗 (鎮西義) に吸収	寂慧 (白幡派)	道観 (嵯峨流) …… 衰退
信空 (白川門徒) …… 浄土宗 (鎮西義) に吸収	礼阿 (一条派)	遊観 (一導 (本山流) …… 衰退
湛空 (嵯峨門徒) …… 浄土宗 (鎮西義) に吸収	慈心 (木幡派)	聖達 (一遍 (時衆) …… 時宗
	道光 (三条派) …… 衰退	
	一向 (一向宗) …… 浄土宗 (鎮西義) に吸収	
		了音 (六角流) …… 衰退
		了音 (六角流) …… 浄土宗西山深草派
		了音 (六角流) …… 浄土宗西山禪林寺派

円仁-->空也-----+

↓ ↓

+>良源-->源信--->法然-->親鸞（浄土真宗）

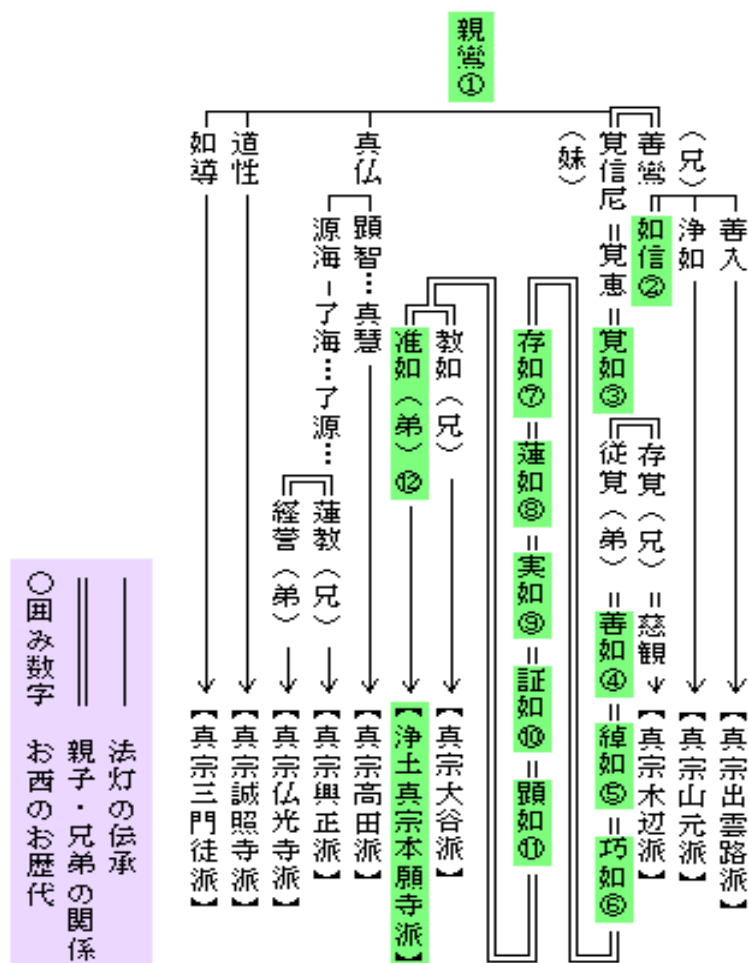
+>証空（浄土宗西山派）->一遍->（時宗）

|

+>弁長--->良忠(浄土宗鎮西派)-->一向（一向宗）

踊り念仏の実質的な創始者は空也上人(903-972)です。一遍上人はその300年後の延応元年(1239)に松山で生まれました。現在、念仏や法華の題目を唱えている人たちの文化を見ている私たちには信じられない話ですが、平安時代の中期頃までは念仏というものは僧が唱えるもので、それを聞くことのできるのも貴族階級に限られていました。それを在家の者でも唱えてよいのだとし、貴族だけでなく一般大衆にも広めていったのが、空也であり、一遍であり、一向であり、数多くの高野聖・時宗聖たちでした。

○ 真宗十派の系統・・・親鸞聖人の法流（現在の真宗教団連合）



* 上記の法流の説明は HP「破闇満願」に詳しい。

<http://www5.synapse.ne.jp/shinkou18/8/index.htm>

《最後におことわりとお詫びを》

この文章をつくるにあたって別添に列記した参考文はいろいろな人のHP文章を模倣し、切り貼りをいたしております。ITメディア用語では「コピー＆ペースト」（略して「コピペ」）というそうです。恐るべしネット社会です。一応、引用元（コピー元？）を明示しておきますので、（本文とは別仕立てだし）著作権侵害にはならないと思いますが。

以下に参考とした文献・文章を掲載します。

上記参考文中に記載のホームページ （URL は省略）プラス 破闇満願（HP）

「一向一揆論」 金 竜静 吉川弘文館

「一向一揆と真宗信仰」 神田千里 吉川弘文館

「本願寺と一向一揆」 辻川 達夫 誠文堂新光社

「一向一揆余話」 出口 治男 方丈堂出版

「一向一揆と部落」石尾 芳久 三一書房